



和田 亨

立教大学理学部化学科 准教授
(前 生命・錯体分子科学研究領域 助教)

12年分の感謝

わだ・とおる / 1998年3月、学習院大学大学院自然科学研究科博士前期課程修了。同年4月、総合研究大学院大学大学院数物科学研究科構造分子科学専攻博士後期課程入学。2001年3月、同修了（理学博士）。同年4月から分子科学研究所錯体化学実験施設助手。2010年から現職。

私は1998年4月に総研大生として分子科学研究所に来ました。総研大生として3年間、助教として9年間、あわせて12年もの長い間分子研にお世話になりました。助教の後半は、私よりも長く分子研に在籍されている方が数えるほどとなりました。充実した12年間を過ごすことが出来、心から感謝しております。

総研大生としてはじめて分子研に来た頃、当時は数少ない私立大出身者であり、また研究分野をそれまでの有機化学から無機化学へ変更したこともあって、分子研でやっていけるのか不安ばかりでした。その不安を払拭するために深夜や日曜日にも実験していたことを今でも思い出します。とにかく知識の量が同級生と比べても明らかに劣っていて、先生方がお話しになる内容は殆ど理解が出来ませんでした。しかし、指導教官であった田中晃二先生から「世界中で誰もやったことの無い研究を始めたら、重要なのは知識だけではない」と言われ、「それならば自分にもチャンスがある」と思い（思い込んで？）実験に臨んでいました。無我夢中で実験をしているうちに、分子研にも慣れてきて友人もでき、生来の酒好きも手伝って週末は東岡崎駅前の居酒屋

をハシゴしていました。実は、この飲み会の席での経験が私にとってはとても大きな体験となったのです。当時の分子研の人々は酒を飲みながら科学を熱く語り、時にはけんか腰になってまで話をしました。何にも遠慮すること無く科学のことを語り合えたのです。ベテランの先生からすると昔は当たり前の光景だったと思われるかもしれませんが、大学で科学を熱く語ると浮いた存在になってしまうのが現実でした。今の分子研の学生にも、その様な良き伝統が続いていることを願います。

錯体物性研究部門田中グループでは、大きな目標を達しなければ基本的には自由に研究をさせて頂きました。それは学生時代も助教になっても変わらず、多くの測定機器を待ち時間なく使用できるという恵まれた環境の中、のびのびと(?)実験しました。私が助教（当時は助手）になった頃、田中グループには私とほぼ同年齢のポスドクが6名も在籍していて、良き仲間であるとともに少しのライバル意識も働いて良い緊張感がありました。錯体化学の分野では研究対象が非常に多岐にわたるため、各自の得意技が異なり、仲間から多くのことを学びました。途中には明

大寺地区から山手地区への引っ越しも行き、研究室を一から設計をするという経験は、今年度立教大学へ赴任した際に大変役立ちました。他のグループとのコミュニケーションが以前と比べて減ってしまったことが少々残念ではありましたが、山手地区の機能的な建物は研究する上ではこの上ない環境だと思えます。

錯体化学の“いろは”から研究哲学まで多くのことをお教え頂いた田中先生、そして歴代の田中グループの皆さん、分子研の皆様にご心より御礼申し上げます。また素晴らしい研究環境を整えてくださった技術職員と事務職員の皆様にも感謝致します。研究所から大学へ大きく環境は変わりましたが、これからは学生と共に独創的な研究を確立できるように努力して参ります。